
いつか書いてみたいと思ったネタの山

リンクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか書いてみたいと思ったネタの山

【Nコード】

N9582R

【作者名】

リンクス

【あらすじ】

これは作者の頭から漏れ出したネタです。出来は酷いです。いつかこんな書けたらなあと思いついた物を適当に上げます。

ISで書いてみたい(前書き)

最初に言っておきます。酷いです。いつか書けたらな、そんな思いしかありません。ええ、そうですとも。故に設定とか酷いです。出来ればご意見をいただけると幸いです。

ISで書いてみたい

空を自由自在に駆けるのは既に鳥などの生まれながらにして翼持つ者達の特権では無く

なっていた。科学が進み、人は飛行機と言う名の翼を手に入れた。

翼を手に入れた人類は

それこそ我が物顔で空を自在に駆ける。しかし、歴史が進み、科学が技術が進み、人は新

たな翼を手に入れた。その名をIS インフイニット・ストラトスと言った。

ISという翼はその見た目と反し、高い戦闘能力と飛空能力を備えており、空の支配者が戦

闘機からISへと移るのにそう時間はかからなかった。しかし、ISには一つだけ絶対にして

覆す事の出来ない掟^{ルール}があった。

それは女性にしか扱えない、という事である。これにより世界が女尊男卑の風潮が世界

に広がった。それに伴い、男性には決して装着することの出来ない兵器IS。この兵器の存

在により多くの男性軍人がその職を辞する事となってしまうた。しかし、それでも、翼を

奪われようと、軍人である事に誇りを持つ軍人達は軍に残った。

これは尊厳と翼を奪われても尚、軍に残った一人の軍人の物語。

ドイツとオランダの国境間近の空を五つの影が飛んでいく。

状況としては一つの影を後ろから四つの影が追う形である。

追う側の部隊はドイツ軍IS配備特殊部隊、名をシュヴァルツェア・ハーゼと言う。

この部隊の隊長を務める少女の名をラウラ・ボーディツヒと言った。

部隊の先頭に行くラウラ機に後方を追隨する隊員からの連絡が入る。

「大尉、まもなく国境を超えられてしまいます！ このままでは……ッ」

「分かっている！ くそっ、気づくのがもう少し早ければ難なく追いつくことが可能だと

言うのに……ッ」

大尉、と呼ばれた少女は悔しそうに零す。

彼女らに与えられた任務はドイツ国内のIS研究資料を盗み、他国へと亡命しようとしている

人物の捕縛であった。しかし、発見が遅れたが為に距離を詰める事が出来ずにいた。

既に対象は国境付近まで飛んでおり、このままでは逃げられてしまう。

焦るラウラに先程とは違う女性が声をかける。

「大尉、時間がありません！ どうしますか!？」

「……」

ラウラは意を決し、通信機をある場所に繋げる。

「ファルケ1、頼む」

「ファルケ1了解。ボーディツヒ大尉、道を開けて下さい」

通信機から返ってきたのは低めの男性の声だった。

しかし、ISは男性には扱うことは出来ない。ならば、男性は何処にいるのか。

その答えは直ぐに判明した。

「全機、目標との直線ルートを開ける！」

ラウラの号令の下、部隊が左右に分かれ、前に行く機体との間に一直線の道が完成する。

突如として左右にバラけた事に逃げているISは訝しむが、既に国境は間近であることが

ら特に気にする事はないだろう、と判断し視線を前に戻し、全速力で駆けようとした時、

「緊急警告！ 回避！」

という文字がISから発せられると同時に強い衝撃がISを襲った。それは一発の銃弾。

しかし、ただの銃弾ではなかった。それはIS戦闘において使用される対IS用徹甲弾。

徹甲弾は一撃でISのシールドエネルギーを全て持って行き、機体はEmptyの文字を出し、空から落ちていく。撃墜されたISのパイロットは最後まで何が起きたのか理解する事は出来なかった。

現場から12km離れた場所にて一つの影が動く。それは可笑しな格好をした男だった。

男の格好は体全体を機械で出来た装甲に包まれており、頭には複数のセンサーが付いた

ヘルメットを、足には体を固定するための装置、肩には大きなカメラの様な物を取り付

けられていた。そして、なによりも目を引くのが余りにも長大な銃身を持つ狙撃ライフル

だった。男はライフルを地面に起き、

「任務、完了」

そう呟いた。

聞こえた声は先程のファルケ1と同一の物だった。

一息つこうと寝転ぶ彼の下に再び通信が入る。

「……こちらファルケ1」

「ラウラだ。ファルケ1、相変わらずいい腕だ。我々はこれより帰投する。その後少し

話す事があるから残ってくれ」

「ファルケ1了解」
彼が返事をする通信は切れ、場に静寂が戻る。ゴロン、と寝転んだ彼の頭上には空が広がっている。彼は手を真つ直ぐに空へと伸ばし、掴もうとするが、当然の事ながら掴める筈がない。彼にだってその位の事は分かっている。それでも「それでも、もう一度自在に空を飛びたいのさ」
そう呟いた後、彼の頭上を5機のISが飛んでいく。
「帰ってきた、か」
彼は身を起こし、彼女等を迎えるために歩き出した。

任務を終え、解散となった後残ったのはラウラと男の二人となった。

「それでなんですか？ ボーディツヒ大尉」

「織斑教官の弟の事だ」

「ああ、男性で唯一ISを動かせる人物」

興味の無いようにつぶやくが、その心情は穏やかな物ではない。唯一の男性IS使い。この現代で唯一空を駆ける事の出来る男。羨ましくない筈がない。

「そうだ、織斑教官の経歴に汚点をつけた男だ。少ししたら私はそいつの下に行き

織斑教官を連れ戻してくる」

「……それが自分に何の関係が？」

「その道中にお前も付いてきて欲しい」

「……ボーディツヒ大尉、自分は男性です。ISは使えません。連れて行くならば他を当てるがよろしいかと」

「確かにISは使えない。だが、技量は部隊の誰よりも高い。付いてきてくれ」

「それは命令ですか？」

「命令ではなく要請だ。少なくとも私はお前に付いてきて欲しいと思っっている。」

共に来てくれ、バロス・リヒター中尉」

「………了解しました。ラウラ・ボーディツヒ大尉」

以下はなんとなしに考えた設定集

バロス・リヒター

主人公。歳は18。男性でありながらドイツ軍IS配備特殊部隊シユヴァルツエア・ハーゼ

に所属。しかしISは動かせない。代わりに独軍で独自に開発された特殊強襲用装甲

（以下SAA）を所持している。出自としてはラウラと同じ試験管ベイビー。しかし彼の場合

はISではなく身体能力の向上を目的とした存在である。そのため五感が常人よりも発達して

いる。所持するSAAは狙撃戦に重きを置かれている。

特殊強襲用装甲

通称SAA。ぶつちやけると漫画『Red Eyes』のSAAです。あの漫画好きなんです。

全身を覆う装甲と背中に装備されたバーニアによって陸上においては比類なき機動力を

誇るが、ISがあればSAAいらなくね？ とドイツ国内からも見向きされない。それでも一

部の軍人は使っている。男性でも使えますからね。まあ空飛べませんが。

ラウラとの関係

同じ試験管ベイビーとしての仲間意識？ これが恋愛となるかは不明。

ESで書いてみたい(後書き)

うーん。ラウラが可愛いからつい書いてしまいました。あまり反省はしていません。

衝動で書いてみた(前書き)

最初に言っておきます。
くだらないです。

衝動で書いてみた

俺に聞きたい事があるってのはアンタかい？

アンタ、名前は？

そうか、ティアナ・ランスターってのか。

それで、こんな辺鄙な所までわざわざ来て何を聞きたいんだ？

ここは窓際族が集まるような場所さ。

お前さんのような優秀な社員が来るべき場所じゃあないと思うが
ね。

ああ、すまねえな。話がずれた。

それで聞きたい事は何だ？

ああ、Mr.ギフトマンの事か。

アンタ、何でアイツを探してるんだ？

いや、アイツを捜す理由は一つか。

嬢ちゃん、アンタもあれか。

『強くなりに来た』口か。

やめとけ、やめとけ。

確かに、アイツと会えば強くなれるかもしれねえが、それは無理
だ。

無理かどうかは分からないって？

やれやれ、そんなに必死な顔をすんなよ。

俺が悪者みたいじゃあないか。

まあいい、アイツの事を教えてやろう。

だが、その前にアンタはどれくらいアイツの事を知ってるんだ？

その内容次第で俺が教える事があるかどうか判断するからな。

さあ、聞かせてもらおうか。

私は焦っていたのだろう。

なにせ、今の私の所属は管理局古代遺物管理部 機動六課だからだ。

あそこには管理局内のエースと呼ばれる人物が集まっているからだ。

そして、新たに集められた私を含めた新人四人も私を除いて、皆エースたる素質を
持っていたのだから。

だからだろう。

私が彼を会おうと思ったのは。

彼、Mr.ギフトマンは管理局、特に地上本部では有名な噂話の一つだ。

曰く、異名の通り、何者も彼に触れる事は出来ない。

曰く、彼には如何様な魔法も効かない。

曰く、届いたとしても、無傷である。
曰く、その速さは誰の目にも止まらない。

これだけでも眉唾物だが、彼に関する噂で一番有名な物は、
彼を打倒出来れば強くなる。
という物だろう。

何を言っているのか、と思うだろう。
私もそう思った。

たかが人一人を打倒したぐらいで強くなれるならば、誰も苦労し
ない。

しかし、それでもこの噂が現実味を帯びているのは、実際に強
くなった人物が
いるからである。

その人物こそが、私の友であるスバルの姉、ギンガさんである。

彼女はある日を境に急激に強くなった。

なんと、その魔力ランクを一日にして二段階も上げたのだ。

当然、周囲はその理由を探ろうとしたが、彼女は

「彼との約束だから、話せません」
とだけ言った。

しかし、いつからか彼女が強くなったのはMr・ギフトマンを打
倒したからだ、
という噂が立った。

それからだろう、ありとあらゆる人物が彼を見つけようと躍起に
なり始めたのは。

私もその一人だった。

だって、たった一人の人物を倒すだけで強くなれるんだもの。

私は強くなりたい。
証明するために。

彼は突然やってきました。

その日はそうね、とつても空が綺麗だったのを覚えているわ。

彼は私の所属する部隊にフラリとやってきて、そのまま所属する事になったの。

彼の魔力ランクはC。

決して、高くは無いけど低くも無い、中堅レベルの実力。

そう、思っていたの。

でも、違った。

彼は強かった。

レアスキルか、何かだと思っただけけれど、魔法が一切効かず、その速度は

普通の生まれではない私の目でも追う事が出来なかった。

信じられる？

人って一つの瞬きの間に消える事が出来るのよ？

私はいつしか彼とチームを組む事が多くなっていた。

彼が攪乱し、私がトドメをさす。

中々に良いチームだと思っただわ。

あの時が来るまでは……。

あれは、お父さんの勧めで彼と一緒にお酒を飲みに行った時だったわ。

恥ずかしいんだけど私相当酔っていたみたいだね。
お店を出た時にはフラフラだったのよ。

隣にいた彼とお父さんが肩を貸してくれたんだけど、私酔った勢いで彼を殴っちゃったのよ。

別に彼に対して、嫌な感情を抱いていた訳じゃないの。
むしろ、その逆というか……。

まあ、彼には魔法とかが一切効かないというのもあったからなんだろうけど。

だけどね、その時だけは違ったの。

なんていうのかな、こうクリーンヒットだったのよ。

その時だったかな。

こう、頭の中に直接可笑しな文章が浮かんだのは。

その内容は確か……。

ギンガのこうげき！

かいしんのいちげき！！

ギンガのレベルがあがった！！

だったかしら。

その後だったわ。

私の魔力レベルが跳ね上がったのは。

もう、その後は大騒ぎ。

私の魔力は跳ね上がるは、彼は立ち上がらないし。

取り敢えずあの場を一人で何とかした父さんには感謝してもしきれない。

それからかな、彼を探しに大勢の局員が動いたのは。

皆、目を血眼にして彼を探していたわ。

まあ、彼の速さには誰も追いつけないから、無理でしょうけど。

それにしても、あのかいしんのいちげきって何だったのかな。

あ、そうそう。

最後に一つ、彼って結構臆病だから、あんまり迫らないであげて。

じゃあ、私は彼の所に行くね。

衝動で書いてみた（後書き）

続きませんよ？

主人公の能力というか、正体があった方は感想にでも書いてください。

それでは失礼します。

一番で書いてみました(前書き)

活動報告にて皆様からご意見をいただき一番の方で書いてみました。
話自体は短いですが下の方で設定とどうか妄想を書いておきます。

一番で書いてみました

魔女が呪いを掛けるのはお姫様だけだと思うかい？

1929年、京都。

京都には多くの名家が存在する。京都にある近衛家もその一つだった。

そして、今日もまた近衛家から怒声上がる。

「近右衛門！ 待たんか！」

ドタドタと廊下を走る二つの影。逃げる方は歳は15〜16位の青年であり、青年を追う男

の歳は40歳程だろう。近右衛門と呼ばれた青年は軽快な足取りで廊下を駆けながら、自身を追う男に叫ぶ。

「すみません、父上！ これから銀達と会う予定がありますので！」

「またアイツ等か！ 何度言えば分かる！ 私たち近衛家は誇りある家系！ その嫡男が

あのような輩と組んでいるんじゃない！」

父と呼ばれた男は額に青筋を浮かべながら叫び返す。

「父上が何と言われようと私は彼等と共にいますよ。それでは、失礼！」

近右衛門は懐から一枚の紙を取り出すと、それを正面に構え、一言呟く。

すると、紙が光り近右衛門の姿が消えていった。

「近右衛門！」

父の怒声が響くが、既に彼の姿は消えていた。

「あんの馬鹿者があああああ！」

近衛家から2km程離れた場所にある河原に二人の青年の姿があった。

二人が地べたに座りながら話していると、近右衛門が走ってきた。

「お、近右衛門が来たぜ」

「本当かい？ 今回も親父さんから逃れられたんだね」

「みただいな」

近右衛門は二人を見つけると、河原に降りてきて、乱れた息を整える。

「おせえぞ、近右衛門」

「悪いな。また父上に追いかけてた」

近右衛門の言葉に二人は苦笑する。いと

「大変だな、名門近衛家の嫡男は」

「からかうなよ。それに銀丈、名家っていつならお前の所もそうだろうが。坂月組の跡取り
だろっ?」

近右衛門の言葉に銀と呼ばれた青年は頭をかく。

「俺の所は名家というか、ただの極道だろうが」

坂月組、それは京都に古くから存在する極道であり、昔ながら仁
侠道を貫いている
為、地元の人間からは頼りにされている組であった。

現在の坂月組は銀丈の父が率いており、父が引退すれば息子である銀丈が組を
受け継ぐことが決まっている。

「まあまあ、近右衛門も銀丈も家の事はいいじゃないか」

二人に声を掛けたのは今まで沈黙を保っていた眼鏡を掛けた司書
風の青年だった。

「泰造、そうだな。俺たちは家の事から離れて遊ぶ為に集まってる
んだもんな」

「相変わらず泰造がいると話が脱線しなくていいな」

近右衛門と銀丈に褒められ泰造は何処か恥ずかしそうに頭をかく。

近衛近右衛門、綾瀬泰造、そして坂月銀丈。

この三人は気がついたら常に一緒におり、何をするも一緒だった。

『技』の近右衛門、『知恵』の泰造、『力』の銀丈。

京都で生活を営む市民で彼等を知る者は皆、口を揃えて彼等の事をこう呼んだ。

『京都のアン、ポン、タン』、と。

主人公 坂月 銀丈

京都に古くから存在する極道坂月組の跡取り。短く刈り込まれた黒髪と鋭い目付きをしており、極道の跡取りに恥じない外見を持つ。

頭はあまり良くないが、義侠心に溢れており、組の連中からは「若」と呼ばれ慕われている。身内の一人に剣術、居合を教授されており、腕はそれなりにある。

魔力は皆無。気は人並み。

近衛 近右衛門

銀丈の仲間その一。基本は原作と同じ近衛家の嫡男。銀丈、泰造と行動を共にすることを父に咎められるが、本人は何処吹く風で付き合いを止めない。膨大な魔力と気を有する。

綾瀬 泰造

ネギまの綾瀬夕映の祖父。三人組の知恵袋の様な存在で、よく喧嘩する近右衛門と銀丈の仲裁役を担う。中流階級の家の出であり、一族揃ってのビブリオマニアである。魔力は常人よりは多い。これが夕映に受け継がれる。

ここからは妄想。

ヒロインは造物主。造物主が世界を見る為に旅をしている最中に銀丈達と出会う。そこで銀丈が一目惚れをし、半ば無理やりに造物主を家に招く。造物主も長らく人と触れ合っていなかった為、仕方ないと言いながらも逗留する。ここからは三人組ではなく四人組となった。後に戦争が始まり、三人は戦争へと駆りだされる。その先で銀丈は致命傷を負い、死に瀕する。そんな銀丈の様子を遠見の魔法で見た造物主は銀丈を助けるために彼に治療を施す。しかし、彼は既に死にかけていたため、そこからの治療には彼の体をいじる事となってしまう、結果銀丈は不老になってしまう。(不死ではない)。この事を悔いた造物主は銀丈に泣きながら謝り、彼の前から姿を消す。銀丈は彼女に再び会う事を目的とする事になる。その後、彼は近右衛門、泰造と共に麻帆良へと赴く。近右衛門も泰造も歳を取っていく中、一人残される銀丈。それでも彼等の友誼は変わらず、麻帆良学園都市が出来、銀丈は坂月組の本拠を麻帆良に移す。近右衛門を学園都市の顔役とし、銀丈は商店などをまとめる顔役となった。泰造もまた麻帆良に越してくる。その後、ネギがやってくることで物語が動く。

まだ全体的に酷いですが、こんな感じです。

一番で書いてみました(後書き)

こんな感じですよ。まあ、まずは今連載している物を頑張っ
て完結させますので。

それでは失礼します。

衝動書きです(前書き)

10月にアーマードコア?が発売するのでつい書いてしまいました。内容は酷いです。ただ脳内から溢れ出るコジマ粒子のせいです。ええ、そうですね。AMSが逆流しますとも。

衝動書きです

天災は言う。

『彼？ 彼は私だよ』

天敵が言う。

『アイツ？ アイツは俺だ』

天災と天敵が歌う。

『俺たちは求め続けている』

『この世に、この世界に』

『さあ、教えてくれ』

『私たちに答えを』

天敵はいつ生まれたのか。

人類が母なる地球から飛び出した時？ 壊死していく地球を救おうと思想家が立ち上がった時？ きつと違う。天敵は一人の思想家の言葉から生まれたのだろう。

思想家たる古き王は言う。

『革命など結局は人を殺すしかないのさ。だろう？』

この時からだろう。一匹の山猫が人類種の天敵への道を歩み始めたのは。

山猫は人類種の天敵となり、多くの命を無差別に奪っていく。

天敵への道を歩む中、相棒たる古き王がその命を散らし、自らを鍛え育て上げてくれた

師であり、大切な人の命をその手で奪う事となっても彼は歩みを止めない。

自身の分身とも言える機体に限界が訪れようとも進み続ける。

整備は行われず、悲鳴を上げる機体。

そして、己の体を省みることなく、戦い続けたがゆえに訪れる自身の限界。

それでも彼は止まらない。止まることは許されない。

遂に天敵はその命を終えようとしていた。だが、彼には死への恐怖などなく、求める

物はただ一つだった。彼は手を空へと伸ばし、呟く。

ただ、答えを求め続けて。

「やあやあ、君は一体誰かな？ 此処は私しか入る事は出来ない場所なんだけどな」

彼がうつすらと目を開いた先には頭に機械で構成されたウサギ耳を着けた女性が

こちらを覗き込んでいた。

衰弱し切った体では口を動かすのも億劫だったが、彼は罅割れた唇を動かし呟く。

「……を。答えを……知りたい」

「答え？ なんの答えかな？」

「人類の……。世界の……。俺という存在の答えを……」

喋る度に罅割れた唇から血が滲み出る。

彼の言葉を聞いた女性の瞳に今までとは違う感情が浮かんでいた。

「君は答えを知りたいのかな？ 天才たる私なら知らない事は無い、と言いたいところだ

けど、残念ながら私もその答えを探しているんだ。だから答えられない」

彼女の言葉を聞いた彼は一つため息を漏らす。

それは、答えを得られなかった事への嘆きだろうか。

女性はそんな彼を見ながら、一つの提案を差し出す。

「答えが知りたいんでしょ？ 私も探してる。だからさ、一緒に探さないかい？」

「答えを、全ての答えを」

天敵はその言葉に目を点にする。

今までの人生で導いてくれた人や、自身を相棒と呼んでくれた男はいた。

だが、共に探そうと言ってくれた奴はいなかった。

だからだろう。

「……何故だ」

「うん？」

「何故、共に答えを探そうと言う？ 俺とお前では答えは違つかも知れないというのに」

女性は整った顎に細い指を当て、笑う。

「大丈夫。きっと同じさ」

「根拠は？」

「天才の勘だよ」

なんだそれは。と思わずにはいらなかった。
だが、たまにはこんな気まぐれがあってもいいじゃないか、と思
う自分もいた。

「さあ、返答は？」

「……いいだろう。しばらくはお前と共に答えを探そう」

「うんうん。じゃあ改めて私の名前は篠之ノ束、天才だよ」

「俺は、リンクスだ。人類種の天敵と呼ばれている」

ここに天災と天敵の邂逅が成った。

この時は天敵は未だに此処が自身の世界とは違うという事に気づいてはいなかった。

天災はそれに気づいていた。しかし、彼女はそれを指摘はしなかった。

それはどうせ直ぐに気づくことだと思っていたし、彼の前にそんな事は些細な事だと思っていたからだ。

後に彼女は彼の為に、自分の為に、答えを知るために一つの機体を造り上げる。

その名は。

『F o r A n s w e r』

ただ、答えを知るために造られた機体。

天敵は『F o r A n s w e r』を駆り、ひたすらに世界に問い続ける。

そして、その矛先が次に向けられるのは、無限の可能性を秘めた子供たちがいる場所。

IS学園となった。

そして、彼は、彼女は問い続ける。

「さあ、答えを教えてください」

「答えを知る為に私たちは共にいる」

「お前たちの答えはなんだ？」
「君たちの答えはなあに？」

衝動書きです（後書き）

ISとアーマードコアのクロスって多いですね。ちなみ主人公の機体ですが、基本はオールドキングのリザを所々改修した物と思っ
てください。ちなみに妄想として追加パックとして「アンサラー」
があります。機体を主人公ごと包みこむ感じの武装で見た目はまん
まあのアンサラーです。

コードギアスは現在執筆しております。もう少しお待ちください。

リリカルなのはforceで一発ネタ(前書き)

すいません。コードギアスの方が少し詰まったのでその場のノリで書いてみました。勿論続きませんし、クオリティは高くありません。

リリカルなのはforceで一発ネタ

新暦81年

時空管理局が所有する拘置施設の中でも最高拘置施設である衛生軌道拘置所におおよそ拘置所には似つかわしくない程の陽気な鼻歌が響く。

この拘置所に投獄されている人物はいずれもが次元世界、ひいては時空管理局を滅ぼす一歩手前までの罪を犯した重犯罪人達である。彼等がこの拘置所から出る事は無く、事実上の無期懲役を課せられているのである。

だというのに拘置所に響く鼻歌は何が楽しいのか途切れる事は無い。

鼻歌の出所は衛星軌道拘置所の中でも最も深くにある独房からだった。

「　　」

「楽しそうだね。フォード君」

「　　。んん？　五月蠅かったかな？」

「いや、そんなに嬉しそうなのは久々だからね。つい気になっただけさ」

フォードと呼ばれた鼻歌の男は鼻歌を止め、話しかけてきた方と会話を始める。

鼻歌の男に話しかけた男の名をジェイル・スカリエッティと言った。

ジェイル・スカリエッティは『J S 事件』と呼称される事件においての主犯であり、その罪により此処に投獄されていた。

「くふふ。ご機嫌になるのも仕方がない。なにせ匂いがするんだ。懐かしくも楽しい
楽しい鉄火場の匂いが」

その言葉を聞いたスカリエッティは自身の額にたらりと汗が流れるのを感じた。

だが、それと同時に自身が笑みを浮かべているのにも気がついた。

男の鼻歌が二番に入り始めた時だった。

「そつえば君はどうして此処にいるんだい？」

「あれ？ 話した事なかったか？」

「ないねえ。というより私が此処に来た時には君は此処にいただろう。」

「一体何をやったんだい？」

「ん〜。俺かあ。俺はなあ、やり過ぎたのさ」

「やり過ぎた？ なにをだい？」

「くふふ。全てをだよ」

そう言っつて男は再び歌い出す。

これ以上答える気はないのだろう。

そう判断し、スカリエッティも聞くのを止め、自身も鼻歌に加わる。

衛星軌道拘置所最深部にある二つの独房から歌が響く。

それから幾日か経った頃だった。

客人が現れたのは。

客人は時空管理局の制服、それも高官の物を着ていた。

客人の名をリンディ・ハラウンと言った。

「フォード、久しぶりね。元気にしてるかしら？」

「おやおや、時空管理局本局総務統括官殿とは珍しい客人だ」

「ジェイル・スカリエッティ。貴方に話しかけている訳ではありませんせん」

「……リンディか。なんの用だ」

フォードはリンディの顔を見た途端に顰めっ面になる。

どうやら余り会いたい相手ではないようだ。

「世間話をしに、だったら良かったんだけどね。まあそれは後でも出来るわ」

リンディはその顔を旧知に会いに来た友人の顔から時空管理局本局総務統括官のソレへと変化させる。

「フォード・ボーゲンヴァツ八元特務提督。貴官を現時刻を持って此処、衛星軌道拘置所から仮釈放します。尚、仮釈放に伴い貴方には一つの任務をこなしてもらいます。」

この決定に貴官の意見の入る余地は無い物とと思ってください。質問はありますか？」

「……無いさ。やれやれ自分達から俺を此処に放りこんでおきながら何かあれば」

すぐそれだ。時空管理局の未来は暗いぜ。なあそう思わないかい？ お隣りさん」

「まったくだね。それにしても君が特務提督だったとはね。本当に何をしたんだい？」

「言っただろう？ やり過ぎたのさ」

フォードは笑って、リンディに連れて行かれた。

リンディによって連れだされたフォードは時空管理局本局にある

次元航行艦ドッグ

にいた。そこには数多くの次元航行艦が整備の為に所狭しと並んでいた。

ドッグの一番奥にそれは鎮座していた。

フォードはソレに近づくと、次元航行艦から声が響く。

『お勤めご苦労様です。マスター』

「アルマダ。久しぶりだな。それよりもまた可笑しな知識を覚えたな」

『暇なんですよ。貴方が投獄されてから。私は貴方以外に使われるつもりは

ありませんので。まあ、貴方が出てきたのでこの暇な時間も終わります。始めますか？』

「くふふ。そうだな。リンディ、俺を出したって事は『そういつ事』なんだろう？」

「ええ、そうよ。さあ、行きましょう。貴方への任務は艦内で伝えるわ」

「ええ？ お前も来んのかよ」

「当然です。私は貴方の監視も任務なのよ。貴方がやり過ぎないようにね」

「けっ。まあいい。アルマダ、出航だ」

『Yes・sir』

第23管理世界ルヴェラ。そこでは二隻の艦による攻防戦が行われていた。

先を進むのが凶悪犯罪者集団と呼ばれる『フツケバイン・ファミリー』の艦である
飛空艇フツケバインであり、それを追うのは時空管理局特務六課の艦である

LS級艦船ヴォルフラムだった。艦の性能ならばフツケバインが数段上であるため、
ヴォルフラムは中々に捕捉出来なっていた。

ヴォルフラム艦橋にて特務六課を率いる八神はやてが矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「ええか！　ここでフツケバインを捕らえられなければ次のチャンスはいつ来るかわからへん！　全員、気合いれてこか！」

八神の指示に艦橋にいる全員の返事が響いた。

「艦長！　上空に次元転移反応！」

「なんやて！？　識別は！」

「識別、青！　時空管理局の物です！　……嘘、この識別番号って」

「どっしたんや!」

「じ、次元転移してくるのは特殊艦船、識別名称『アルマダ』です
!」

報告の言葉に艦橋にいる全員が固まる。

「アルマダやお!？ アレは動かん筈やろ!？」

『それがそうじゃないのよ』

八神の叫びに答えるかのように通信が開いた。

「リンディさん!？ どういう事ですか!？」

『はやてさん。貴方も知ってるでしょ？ アルマダを動かすことの出来る唯一の人間の事は。時空管理局本局はフツケバイン・ファミリーに対抗する為、彼の仮釈放を決定しました。そして、それと同時に特務六課に言い渡します。即刻この場を離れなさい』

「そんな!？ 納得できません!」

『はやてさん。巻き込まれたいの?』

「はい?」

『貴方は若いから知らないかもしれないけどアルマダは危険なのよ。』

巻き込まれても良い
というならばそこで見ていなさい。アルマダの、それを操るフォードの戦いを』

そう言っつてリンディからの通信は切れた。

それと同時にアルマダが動き始める。

アルマダは時空管理局の所有する中でも最新と言っつても過言ではないヴォルフラムを
いとも軽く追い越し、武装を展開する。

「……なんや、それ」

八神の口からそんな言葉が漏れる。

それは艦の正面に巨大な砲身を備えた主砲と艦の横にはえきれない程の砲身。

そして追加展開された巨大なブースター。

「あれが、無敵艦『アルマダ』」

アルマダ艦橋でフォードが笑う。

「くふふふふふふふ。久々だ。この空気。たまらない。楽しくて楽しくて楽しすぎる。」

アルマダ、主砲発射準備、それと並行して全魔導ミサイルを発射用意」

『了解』

「行こうか、アルマダ。久々の鉄火場だ！ 派手に逝こうぜ！！」

フォード・ボーゲンヴァッハ

元特務提督。リンディ達と同期であり、若い頃はクライドとリンディを取り合ったという

噂も、あつたりなかったり。デバイスはアルマダ。一応インテリジエントに扱われるが

アルマダは自身を次元航行艦に接続することで初めて性能を発揮する特殊型デバイス。

フォードが拘置所に入っている理由は簡単。

本文にも書かれている通りやり過ぎた。

原作から相当前の時代にとある任務でアルマダによる広域殲滅を行い、その罪で投獄。

それに伴いアルマダも解体される筈だったが、その性能を惜しんだ上層部により保管

されていた。アルマダはフォードの命令しか聞かない為、今回の件でフォードの仮釈放が

決定した。ちなみに監視を言い渡されたリンディは若き日を思い出すと満更でも無い。

リリカルなのはforceで一発ネタ(後書き)

うん、すまない。取り敢えずforceが兵器っぽい感じだったから書いてみたんだ。正直やっちゃまった感が否めない。ちなみにヒロインはリンディ。誰得だろう？ ……俺得？

それでは次はコードギアスで会いましょう。

恋姫十無双で書いてみた(前書き)

とりあえず書いてみました

恋姫十無双で書いてみた

何時誰がそう呼び始めたかは定かではない。

正統な道を歩んだ歴史は『正史』と呼ばれ、正統を外れ本来の流れとは異なる道を歩む

歴史は『外史』と呼ばれた。

外史には人々の様々な感情が詰められたものである。

ああ、あの時こうであれば、あの時こうしていれば、誰ソレと会わなければ。

そんな思いが形を成したのが外史である。

これはそんな外史の一つのお話。

もしも、もしも三国時代の英雄達が女性であったのならば。

そんな荒唐無稽な思いで紡がれた外史。

そんな外史を走り抜けた一人の男の物語。

。

涼州に生を受け、ホウ徳の名を真名として銀司の名を受け涼州で生きてきた。

思えば物心ついた時から馬鹿ばかりやってきた気がする。

馬に乗れるようになってからは何をしても馬と共にやった。

何をやったかって？

そうだな、何でもだ。

悪戯から喧嘩、遠乗りから狩り、それこそ数えきれないぐらいさ。

気がつけばいつしか人は俺の事を『ホウ家の大馬鹿者』と呼んだ。

そりゃあ従兄のホウ柔と比べられりゃ俺は柄が悪い。
だが、そんな俺を慕う奴等がいた。

そいつらは大体がどこぞの家の次男や三男、言わば家督を継がない奴らや、悪たれと

呼ばれる奴らさ。最初はそんなに数もいなかったはずなんだがなあ。

気がつけば大所帯さ。

まあ、いつまでも唯暴れまわるだけの悪たれじゃあマズイ。

そう思っただ俺は齡13の時に涼州に数多くある軍閥の一つ、馬騰様の軍に志願した。

地元一帯では俺にかなう奴なんていなかったからよ。

まあ、なんだ、恥ずかしい話だが天狗になってたんだわ。

そんな天狗な俺の鼻っ柱を叩き折ってくれたのが馬騰様だった。

軍に入った直後に俺に声を掛けてきたかと思えば剣を投げてよこした。

腕試しかと思ひ、受けてたつたはいいんだが、向こうは動こうとせず俺に向かつて

指を動かし、かかってこいなんて言ったのさ。

その時の俺はしつこく言うようだが天狗になってた。

だからよ、思いつきり斬りかかっちゃまったのよ。

結果は言わずもがな。

惨敗も惨敗。完敗だ。

手も足も出なかった。

何度斬りかかってもスルリと柳の葉を相手にしてるみたいに避けられて、気が付けば
首元に剣を突きつけられてる。そんなやり取りが何十回と続いたんだ。

もう、俺の自信なんて粉微塵よ。

それだけだったら、俺は軍に残ってない。

さっさとオサラバしてたさ。

でもよ、馬騰様は言ってくれたんだよ。

『筋は悪くない。どうだ？ その才、私の元で開花させてはみないか？』

ってよ。その時に見せてくれた馬騰様の笑顔がそりゃあ綺麗だったね。

ああ、この人なら仕えてもいい。そう思わせるに足る笑顔だった。

そこからは語っても詰まらないだけだ。

ただ我武者羅に馬騰様の下で修練を積み、ただ武人としての高みを目指した。

武人としての高みに至る為に知が必要だって言われたら、頭から

煙を出しながらも
六韜や孫子に目を通した。まあ、理解するまで相当な時間がかかったけどな。

そこで気が付けば俺は馬騰様の軍の一軍を任せられるようになった。

どついう意図なのかは知らねえが俺の軍の兵士はどいつもこいつも悪たればっか。

人の言うことなんて聞きやしねえし、何かにつけて反抗的だった。何と云うか俺にそっくりな奴らが多すぎだ。

こついつ奴らに認めさせる方法はただひとつ。

そう、喧嘩だ。

俺はある日、自分の軍の野郎ども全員を練兵場に集めた。

「てめえら！ よく聞け！ これから喧嘩をすんぞ！」

俺の言葉を聞いたあいつらは一瞬ポカンとした顔をしたが、直ぐに歯を剥き出しにして笑う。どいつもこいつも好戦的な笑顔だ。

そこからは覚えてない。

気が付けば立っているのは俺だけで、周りには死屍累々。

いや、実際には死んでないんだけどよ。

この大喧嘩の翌日から全員に認めさせる事は出来た。
出来たんだが、なぜか全員が俺の事をアニキと呼ぶようになった。
何故だ。

涼州の将として戦働きをし始めてから幾年月。
漢の命脈は衰え始め、世は乱世となった。

黄巾の乱に始まり、反董卓連合という戦乱を乗り越えてからしばらく経ったある日の
事だった。それは突然やってきた。

曹操孟徳が涼州に侵攻をしてきたのだ。

涼州は直ぐに軍勢を集結させ、曹操との決戦へと赴く。
だが、この時既に馬騰様はその体を病で蝕まれ、日常生活にも支障が出ていた。

そして今、馬騰様の娘である马超様、翠が俺たちを率いている。

「銀司。曹操の陣はみえるか？」

「ああ。見えるな。すげえ軍だ。こりゃ厳しい戦いになるな」

「それでも私たちはやらなくちゃならない。母様のためにも」

「わかってらあ。取り敢えず先陣はもらうぜ」

「うん、任せた」

翠の許可を受け、俺は自身の軍を前に進める。

既に曹操の軍は目と鼻の先にまで来ている。

俺は大きく息を吸い込み、叫ぶ。

「てめえら！　ここは何処だ！」

俺の叫びに後ろにいる野郎どもが答える。

「涼州だぜ！　アニキイイ！！」

「てめえら！　ホを言ってみろ！」

「惚れたら火傷じゃ済まないぜ！　アニキイイ！」

「てめえら！　ウを言ってみろ！」

「馬と一緒にどこまでも行こうぜ！　アニキイイ！」

「てめえら！　トを言ってみろ！」

「止まるのは死んでからで十分だぜ！　アニキイイ！」

「てめえら！　クを言ってみろ！」

「苦しい時は俺たちがいるぜ！　アニキイイ！」

『ホ・ウ・ト・ク！　ホ・ウ・ト・ク！　アニキイイイイイイ！』

「よおっしゃ！ 涼州連合馬超軍が一軍、ホウ徳隊！ ぶっちぎって行くぜ！
夜露死苦う！」

設定

主人公 ホウ徳 字は令明
涼州の馬騰軍の将にして主人公。不良。髪型はリーゼントにするかオールバックにするか悩み中。武器として片手斧を両手に持つ。双剣ならぬ双斧。悪たれとして有名で、今の時代でいうなら暴走族のような物を率いていた。

配下も全員がそんな悪たれの集まりでアニキと呼ばれ慕われている。

この後の展開としては正史の通り恐らくは曹操の配下になると思う。翠とは敵味方に分かれる。

ヒロインは未定。

一刀君は蜀の予定。

恋姫十無双で書いてみた（後書き）

一人称だと筆が進むと感じるのは気のせいでしょうか。

まあ、この作品を連載してみたいような気がするのは気のせいではないでしょう。たぶん。

デジモンで書いてみた(前書き)

うん、書いてみたかっただけなんだ。

デジモンで書いてみた

デジタルワールド。

それは現代社会に多く存在する電子機器の中にあるデータが集まり構成された世界。

その世界、デジタルワールドにはとある生物達が数多く生息している。

その名をデジモンと言った。

デジモン達の種類は数えきれず、各々が特徴的な外見を持っており、彼等は時に争い、時に助けあい、生きている。

そして時にはデジモン達は人間の世界へと迷いこむ事がある。

迷い込んだデジモンは時間が経てばデジタルワールドに帰る事が殆どだが、中には迷い込んだ先で出会った人間と親交を深め、パートナーとなる者もいる。

これはそんな一組のタイマーとデジモンの冒険の物語である。

「熱い……」

太陽が燦々と輝き、俺、『榎屋 杜人』の頭上にその光を思う存

分に注いでくる。

周囲は見渡すかぎりの砂漠、頭上には太陽。

「熱い……、熱い……。何で俺はこんな所にいるんだっけ？」

グチグチと文句を垂れていると、横にいる相棒が俺の頭をガシガシといじる。

「モリヒト、あんまり文句を言うな。しょうがないだろう、ゲートの先がなぜか砂漠になっっていたのだから」

そう言ってきたのは、成人男性の身の丈を優に超える大きさを誇る緑のドラゴン型
デジモン、コアドラモン。

このコアドラモンこそが俺のパートナーである。

コイツと出会ったのは、2年程前、俺が小学5年の頃だ。

俺の家は昔から地元で鎮守の森と呼ばれる森を守ってきた一族であり、俺も例に漏れず
教えを受けてきた。まあ、守るといっても何かをするわけでもなく、ただ森が荒れない様に適度に見ているだけなんだがな。

話がずれたな。

俺がコアドラモンと出会ったのは、森を適当に散策していた時だ。

俺の目の前で急に黒い渦が現れたかと思えば、渦の中からコイツ

が出てきたんだ。

出てきた時はそりゃあもう大声を上げたね。

だって、急に馬鹿みたいにでかいドラゴンが出てきたんだぞ？

どんなに肝が座ってる奴でもビビるっての。

それからはコイツからデジモンやデジタルワールドの話聞き、
コイツの自分の

ティマーになってほしいという要望に答え、現在に至る。

それからは度々こうしてデジタルワールドにやってきては、揉め
事を解決してると

訳だ。これはデジタルワールドに来てから知ったことなんだが、俺
以外にもティマーは
結構な数が居るって事だ。

中には選ばれし子供達とか呼ばれる奴らもいた。

いやあ、懐かしい。

アイツら元気かなあ。

コアドラモンが向こうにいたアグモンと知り合いで、無駄に張り
合っていたのは

笑えたな。向こうが究極体に進化出来る、と言ってきたら、コイツ
は物凄く悔しがって

そこからはよく分からんが、修行だ！ と叫んで、デジタルワール
ド放浪の旅に出る事
になったんだよなあ。

ああ、懐かしい。

「おい、モリヒト。現実逃避をするな」

コアドラモンが何か言ってるけど聞こえないし見えない。

ああ、見えないとも。

眼前に見たことの無いデジモンの大群がいて、そいつらが何かの旗を掲げてるの
なんて一切見えないね。

「おい！ その人間、聞いているのか！」

聞こえない、聞こえない。

「我等はバグラ帝国軍三元士が一人、タクティモン様の部隊である！ 貴様等は何者が
疾く答えい！」

なんだよ、バグラ帝国軍って。

そんなん聞いたことねえぞ。

「なあ、コアドラモン。バグラ帝国って何？」

俺がコアドラモンに尋ねると、奴も肩を竦める。

よつするに知らないって。

「あゝ、スマンが俺らはバグラ帝国つてのを知らんのだが、あんなら結局何？」

そう問うと、奴らはあからさまにザワメキ出す。

え、何。

その知らないのか的空気は。

常識なの？

「モリヒト、どうする？ 蹴散らすか？」

「うーん。まあ取り敢えずはその方向でいいんじゃないかな」

「おおっしゃ！」

俺が戦う意志を見せると、コアドラモンはあからさまに喜んだ。ほんと、戦闘が好きな奴だ。

俺も自身のデジヴァイスを構え、戦おうとした時だった。

「待ってもらおうか！」

奴らの奥から一際大きな声が響いた。

すると、目の前の大群がモーゼの如く割れ、中心から一つの影が歩いてくる。

「……誰？」

「我が名はバグラ帝国三元士が一人、タクティモン。見知らぬジエ

ネラルよ、我等が王、

バグラモン様がお前に興味を持った。我々についてきてもらいたい」

「拒否した場合は？」

「……死闘を繰り広げる事となるだろう」

うわ、理知的かと思えば、結局コイツもコアドラモンと同類かよ。
めんどくせつ。

俺は両手を上げ、降参のポーズを取る。

「わかったわかった。一旦アンタの指示に従おう」

「おい、モリヒト！」

「いいから、こいつらが襲ってきたら、その時こそぶっ壊せばいいんだよ」

俺がそう言うと、コアドラモンは一先ず納得したのか静かになる。

「賢明な判断だ。見知らぬジェネラルよ。ではついてきてもらおうか」

タクティモンはそう言うと、こちらに背を向ける。

「あ、ちよいとタンマ」

「むっ？」

「一つ訂正させてもらうぜ。ジェネラルってのが何かは知らないけど俺は、ティマーだ」

「……ティマー？ まあいい。全てはバグラモン様の前でだ」

タクティモンに連れてこられた城にいたデジモン、バグラモンからこの世界の説明を受け、俺は愕然とした。

ここは確かにデジタルワールドなのだが、俺の知っているデジタルワールドでは無い、
というのだ。その証拠のこの世界のデジモンは進化をする事がない
そうだ。

その代わりに人間、ジェネラルと呼ばれる存在がいれば話は別らしい。

これ以上は俺がアイツの仲間になるなら教えてやる、と言われたので、

取り敢えず聞かないで置くことにする。

そうは言っても、見知らぬデジタルワールドでは色々と勝手が違うだろうから

— 先ずバグラ帝国軍に外部の協力者としている事にした。

その旨を伝えた時にバグラモンの顔がもの凄くうれしそうだった、
とだけ言っておく。

よく分からんが三元士はタクティモン以外はあまり人の話を聞かないそうだ。

「ご愁傷さま。胃薬飲む？」

取り敢えず俺はタクティモンと行動を一緒にする事にしよう。

コイツが一番、話通じそうだし。

でも、その『さあ、戦おう！』みたいな視線やめてくんねえかな。

コアドラモン、てめえも受けてたとうとするんじゃない。

ああ、なんか早まったかな。

ため息を一つ着くと、バグラモンがよく分かるぞ、みたいな顔をしていた。

なんだか、コイツとは仲良くなれる気がする。

それから暫く経った頃。

俺はタクティモンと共にあるゾーンに来ていた。

なんでも、ここに新たなジェネラルがいるらしい。

今回はその力量を試しに来たらしい。

まあ、適当にがんばってください。

と、思ってたなら、タクティモンが俺の方を見る。

あ、俺がやるの？

ああ、そうですか。

「コアドラモン、行くぞ」

「おうー！」

俺が前に出ると、そこには俺と大体同年代だろうと思われる奴ら
がいた。

さて、誰がジェネラルかなっと。

ああ、たぶんあの赤いのだ。

なんだか纏う空気が違うもん。

すると赤いのが、

「お前は人間、ジェネラルか！？ どうしてバグラ軍に！」

とか言ってきたのでいつもの様に返す事としよう。

「俺はジェネラルじゃあない。俺はタイマーだ！ コアドラモン、
進化！！」

さあ、戦おうか！

あれ、俺も人のこと戦闘狂だつて笑えない？

設定

榎屋 杜人

現在中学一年。パートナーはコアドラモン。ジェネラルじゃなくテイマー。

小さい頃から森と近く生活をしていた為、アウトドア知識は高い。また、祖父の趣味である将棋によく付き合わされていたため、将棋の腕も高い。

タクテイモンとは良い将棋仲間。

バグラモンとは苦勞人仲間？

外見としては適当に切った黒髪に黒目と正に純日本人といった感じ。

コアドラモン

詳しくはデジモン図鑑を見てね！

進化としては、コアドラモン ウィングドラモン スレイヤード
ラモンといった感じ。

デジモンで書いてみた(後書き)

続きはありません。なんとなくバグラ軍スタート。

ネギま！で書いてみた（前書き）

はい、妄想の垂れ流しでございます。細かい所は突っ込まないでください。

ネギま！で書いてみた

何処かの国の、何処かの路地裏。

そこには一つの鎧が捨てられていた。

いや、鎧ではない。それは鎧を着込んだ一人の男だった。

男の横には古めかしい、しかし整備の行き届いたハルバードが立てかけられていた。

なぜ、此の様な所に鎧を着込んだ男が倒れているのか。

それは分からないが、その男がただの行き倒れでない事だけは確かだった。

重厚な兜の奥にはボンヤリと光が灯る。

男はボンヤリと考える。

あの人に仕えてから幾十年。

ただ槍であれば良かった。

考える力などいらぬ。

ただ、この力を捧げていれば良かった。

あの人を為だけに槍を振るい、あの人を為だけに生きる。

そう過ごさせていればどれだけ良かったのだろう。

だが、その時は終わってしまった。
そう、終わってしまったのだ。

もう、あの人はいない。

己が修羅の如き修練の果てに体得した技も、様々な金属鍛え上げ造ったこの体も、
もうイラナイ。

ああ、これから己はどうすればいいのだろう。

もう己には何もすることはない。

己は何処へと向かえばいいのですか、お嬢様。

己にはもう何も、何も見えないのです。

男はハルバードを軽く持ち、立ち上がるとフラフラと何処かへと歩き出していった。

その道先は誰も知らない。

冷たい雨が降り注ぐ。

雨は道行く人々を濡らす。

人々は濡れないように、傘をさし、店の軒下に入る。

そんな雨の中、一人の老人が番傘をさしながら路地を歩いていた。

老人の名を近衛近右衛門と言った。

彼はその特徴的な頭部から時折『ぬらりひよん』と擲揄されるが、特に気にしたこと

はない。彼は音程の外れた下手糞な鼻歌を歌いながら歩く。

ふと、何かの気配を感じ視線を気配のあった方へと移す。

視線の先には薄暗い路地裏があるばかり。

だが、よく目を凝らすとそこに一つの鎧が座っているのが見えた。

近右衛門は男に近づく。

男からは微かではあるが魔の気配がしたため、声を掛けてみる。

「お主、どうしたのじゃ？　こんな雨の中そんな風にしては折角の鎧が劣化するぞ」

男は近右衛門の言葉に答える事はしなかったが視線を軽く動かした。

兜の奥にある光を見た瞬間に近右衛門は悟った。

（空っぽじゃ。彼は生きてはいるがそれだけだ）

男は既に視線を地面に戻しており、既に近右衛門の方を見ていない。

近右衛門はもう一度よく男を観察する。

鍛え抜かれた体に、憔悴し切っているというのにその身から発せられる気配が男が
相当な手練であるという事を近右衛門に教える。

近右衛門は気が付けば、男に提案していた。

「のう、お主……」

近頃、麻帆良学園にはある噂が流れていた。

それは『桜並木通りには吸血鬼が出る』という荒唐無稽な物だった。

これは所謂都市伝説と言われる類の物だが、此処麻帆良学園では違う。

そう、麻帆良学園はお伽話などによく出てくる魔法使い達の街なのである。

彼等、魔法使いの間ではこの吸血鬼騒動もただの噂ではなく、実際に存在し、被害が出ている問題なのである。

そして、また桜並木通りに悲鳴が木霊する。

薄くライトアップされた桜並木通りに一人の女生徒が尻餅を付いている。

彼女の体は恐怖で小刻みに震えていた。

「いやあ。来ないでっ」

彼女は震える体を何とか動かそうとするも腰は抜けている為立ち上がる事は出来ず、
逃げる事は出来ずにいた。

彼女の前には黒いマントを纏った金髪の少女が浮いていた。

月の光に照らされ、少女の存在は幻想的とも言えた。

「くく、悪いな。貴様の血を少しだけいただくぞ」

それも、彼女が女生徒を襲おうとしていなければ、の話ではあるが。

そして、少女は吸血鬼らしい鋭い歯を覗かせ、女生徒の首元にその歯を立てようと

した時だった。吸血鬼の背筋に冷たい物が走った。

吸血鬼は己の直感に従い、即座に女生徒から離れる。

瞬間、今まで吸血鬼がいた場所を短槍がかすめる。

「何者だ！」

叫ぶ吸血鬼。

短槍の飛来してきた方向に視線を動かすと、そこには重厚な鎧を纏った男がいた。

「……………」

男は吸血鬼の質問に答える事は無く、ハルバードを構える。

自身の質問に答える事のない男に吸血鬼の眉尻があがる。

「答えんか！」

「……………」

「その鎧。そうか、貴様が最近になってジジイの下に付いた部下か」

「……否」

そこで初めて男の言葉が紡がれる。

「否。己は部下ではない。………狗だ」

鎧の男

主人公。名前はまだ無い。武器としてハルバードを振るう。永い時をある人物に仕えて

いたが、その主人が消えてしまった為、生きる目的を失っていた。このまま消えようとしていたところで近右衛門に拾われる。

以後は近右衛門の忠実な部下となる。本人は部下ではなく狗であると言っている。

近右衛門の指示であるならば善悪は関係なく遂行する。

近右衛門が是と言えば非も是である。

他にも色々と思案がある。

ネギま！で書いてみた（後書き）

まさかの主人公が狗。強さ的にはタカミチより強い。

不死人の愉快な篝火の旅（前書き）

取り敢えず完成です！

不死人の愉快な篝火の旅

古い時代

世界はまだ分かたれず、霧に覆われ
灰色の岩と大樹と、朽ちぬ古竜ばかりがあつた。

だが、いつかはじめての火がおこり
火と共に差異がもたらされた。
熱と冷たさと、生と死と、そして光と闇と。

そして、闇より生まれた幾匹かが
火に惹かれ、王のソウルを見出した。

『最初の死者、二ト』

『イザリスの魔女と、混沌の娘たち』

『太陽の光の王グウィンと、彼の騎士たち』

『そして、誰も知らぬ小人』

それらは王の力を得、古竜に戦いを挑んだ。

グウインの雷が、岩のウロコを貫き、

魔女の炎は嵐となり、

死の瘴気が二トによって解き放たれた。

そして、ウロコのない白竜、シースの裏切りにより、遂に古竜は
敗れた

火の時代のはじまりだ。

だが、やがて火は消え、暗闇だけが残る。

今や、火はまさに消え、
人の世には届かず、夜ばかりが続き
人の中に、呪われたダークリングが現れはじめていた……。

火を保ち続けた王は不死人により討ち倒され、世界に闇が満ちる。
火を消したのは一人の男。

人の本質は闇であり、炎は不要。そういった世界の蛇に従い、彼は火を消した。
残されたのは闇。

闇の時代、人の時代の始まりである。

男は闇の中でゆっくりと息を吐き、そのまま座り込む。
既に火は無いが、それが心地良い。

世界の蛇は己の事を『闇の王』と呼んだが、それはどうでもいいことだ。

使命に導かれ、この地へと至り只々我武者羅に己が武技を振るい、敵を屠ってきただけ
の事なのだから。最早、敵は何処にもいない。討ち滅ぼす相手はもう居ない。

……まあいいさ。後はもう眠ろう。

男はゆっくりと瞼を落とし、眠りに付こうとする。

……ああ、だが。もし叶うならば見てみたかった。闇の時代となつた後の世界を。

人の本質が本当に闇なのかを……。

「……されど汝はその目を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。

我はその鎖をたぐる者」

暗い部屋に一人の男の声が響き渡る。

男の目の前には魔方陣が描かれており、それが男の詠唱に共鳴し明滅を繰り返す。

男の名を間桐雁夜と言った。

彼は本来であるならば此の様なオカルトを、魔術を使う家を嫌い飛び出していったの

だが、自身が好意を寄せていた女性の娘、桜が自身の実家に養子に出されたと聞き、

戻ってきていた。いや、戻ってきてしまった。

これがただの養子縁組ならば、どれだけ良かったか。

この養子縁組は魔術という闇が絡み、それに雁夜の家『間桐』の怖気が走る術が

養子に出された少女を奈落の底へと叩き込んだ。

彼は桜を救うという目的とそんな彼女を絶望に叩き込んだ男に思
い知らせる
為に戻ってきた。

だが、魔術を捨て家を出た彼に彼女を救う術は無く、彼は『間桐』
を統べる怪物

『間桐臓硯』に取引を持ちかけた。

それは、『間桐』の目的である『聖杯』を手に入れるという事だ
った。

『聖杯』は万能の願望機であるとされ、それに叶えられぬ願いは
無いという。

この聖杯を手に入れる為に行われるのが『聖杯戦争』と呼ばれる
七人の魔術師による

戦争である。そして、魔術師は自身のパートナー、戦の際の戦士と
してサーヴァント
と呼ばれる英霊を召喚する。

だが、雁夜は魔術を捨てた身であり、サーヴァントを召喚するた
めに必要な膨大な魔力
など持っていないかった。だが、彼はその身に間桐の術を受け入れる
事でそれをクリアした。

その術とは刻印虫と呼ばれる蟲を体の中に住まわせる事だった。

体に宿った刻印虫は彼を即席の魔術師として改造し、彼に魔力を
与えた。

……その代償として間桐雁夜という男の命を貪って。

詠唱を続ける度に雁夜の体の刻印虫がざわめき激痛が走る。
既に口元は血に濡れ、意識は朦朧としている。

今の彼は殆ど死人である。

それでも気力のみで彼は儀式を続ける。

(桜ちゃん……。俺は必ず君を葵さんの下に帰してみせる。君を幸せにしてみせる！)

それが俺の『使命』なのだろうから！)

「汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

そして遂に儀式は完成を迎える。

魔方陣の輝きが増し、部屋を明るく照らす。

ゴォーン……。ゴォーン……。

突如として鐘の音が響き渡る。

雁夜と儀式を見ていた臓硯は辺りを見渡す。

この部屋はサーヴァントの召喚の為の部屋であり、鐘など存在しない。

だが、鐘の音は確かに鳴り響いている。

「なんだ？ 何が起きている」

そして、鐘の音が止み魔方陣から闇が溢れでた。

闇は徐々にその形を人型へと変えていく。

闇が晴れ、中から出てきたのは全身に鎧を纏った騎士だった。

顔に当たる部分は竜を模した兜により完全に覆われておりその素顔を見ることは

叶わず、体全体も重厚な黒い鎧に覆われていた。

雁夜は思わず『竜騎士』という単語を思い浮かべた。

「……お前が俺のサーヴァント、か？」

雁夜の言葉に騎士は何も答えず、唯深く一礼した。

火を消した闇の王は世界を超え、別の新たな世界へと招かれた。

ただ一心に一人の少女を救いたいと願った男は本来の歴史ならば『裏切りの騎士』

を召喚する筈だった筈が、自身の生命を賭け、『鬼札』を引き当てた。

この『鬼札』が齎すのは破滅か救済か……。

火の時代がありながら、闇の世界に浸った男の戦いが始まった。

サーヴァント詳細

クラス：バーサーカー

真名：存在しない。強いていうならば『闇の王』

身長：190？

体重：95？

属性：混沌・悪

イメージカラー：黒銀

特技：武芸、鍛冶

好きなもの：炎・一心に何かを成そうとする人間

嫌いなもの：喋る事・自身の邪魔をする物全て

天敵：不明、強いていうならばセイバー

ステータス：筋力A 耐久B 敏捷E 魔力E 幸運D 宝具A

能力：『闇の王』……火を消し、闇の時代を齎したが故についたスキル。辺りの明かりが

少ない程に能力に+補正が掛かる。

『カリスマB(D)』……人の本質たる闇の王である為に人を惹きつける。相手が

闇に近いほどその効果は上がるが、

バーサーカーとしての

召喚である為に、補正がかかった。

『不死人』……使命を持った不死人。使命を果たすか、正気を失うまで死ぬことは

決して許されない。呪いに近い。これは宝具でもある。

『狂気A』……バーサーカーとしての補正に加え、元々の狂気も合わさり狂気の位は

高いが、それを抑えるだけの理性も持ったため、武技の冴えに変化は無い。

宝具：『底なしの木箱』……生前に集めた装飾品を取り出す事が可能。ただし、

取り出している間は無防備な為、装備の変更を戦闘中に行う

事は殆どない。

『エスト瓶』……不死の勇者に与えられる代物。飲めば不死人の傷を癒す。これは

不死人専用であるが、半死人である雁夜にも使用可。

『ダークリング』……不死人の象徴にしてこのサーヴァントの最大の宝具。

例え死しても、令呪（人間性）を一つ消費する事で蘇る。

ただし、蘇る度に正気を失い、武技の冴えが鈍くなる。

全ての令呪を使ってしまった時、彼は

亡者となり、

マスターともどもに滅びを齎す。

不死人の愉快な篝火の旅（後書き）

戦闘シーンは書けなかった。いつか書きたいです。

雁夜おじさんは呼ぶべきにして彼を呼びました。これぞ死人主従。
うん、すまない。雁夜おじさんを救いたいんだ。

こんな感じですよ。ステータスは結構適当。

ネタが分からない方は現在絶賛大人気販売中の『DARK SOULS』をプレイしよう！これで君も不死人の仲間入りだ！（販促）

では、最後に一言。

汝、人間性を捧げよ……。

ではまた次回。

こちら、有澤重工広報部長です（前書き）

はい、連日投稿です。
楽しんでください。

こちら、有澤重工広報部長です

「……ちょっと、貴方聞いておられますの!？」

私はふいと視線を上空に上げる。

そこには青い空とその空と同じカラーリングの機体が私を見下ろしている。

「ああ、すまないね。まったく聞いていなかった。興味がないものでね」

「んなっ!？ この私の言葉に興味がないとおっしゃいますの!？」

燦々と輝く金色の髪を、美しく整った顔を怒りに震わせる青い機体のパイロット。

名前は、なんだったろうか。

ああ、そうだ。

セシリア・オルコットだったな。

さて、私が何故こんな事になっているかをまずは確認しておくべきだろう。

私の名は広瀬 道隆だ。年齢は19歳。とある企業に就職を希望していた『元』大学生

である。ああ、失敬。『現在』は花も恥じらう高校生だ。

疑問に思う方もいるだろう。何故、大学生が再び高校生をやっているのかという事を。

事情は簡単だ。

この世界にはインフィニット・ストラトスと呼ばれる兵器がある。

私がここにいるのはそれが原因だ。

ISは大天才にして大人災、篠ノ之束によって開発された物であり、その性能はこの世界

に存在する全ての兵器を軽く凌駕している。

故に、世界はこぞってこの兵器を求め、開発をしてきた。

だが、この兵器にはある致命的な欠陥が存在していた。

それは、女性にしか扱えないという事だ。

女性にしか扱えない兵器？ はっ、なんという欠陥兵器だ。

だが、この欠陥兵器こそが私が此処にいる理由である。

そう、私は『男』なのだ。

何故、男である私がISを操縦できるのかと言うのは一言で纏めればこれは全て、あの

大人災のせいである。詳しいことは余り話したくないのでね、割愛させていただきます。

さて、ここで諸君にもう一つ教えておく事がある。

実は、私は『転生者』なのだよ。

ああ、決して頭がおかしくなったわけでは無い。

私はまともだ。

私の前世は一言で言えば『とある企業の一広報部長』だ。

まあ、その世界では人型機動兵器『ネクスス』が闊歩し、世界は荒廃していたがね。

私の所属する企業の名を『有澤重工』。

私の魂の在り処であり、存在の全てだ。

私は有澤重工の開発する兵器の宣伝を行う為に、この身をリンクス、戦士として、ネクストに乗り込み、数多の戦場を駆けていた。

そして戦場で有澤重工の名を社長と共に広め続けた。
社長より目立つ事は許されない。

だから私はランキング戦には出場せず、個人の名を広める事はしなかった。

しかし、それに不満はない。

何故なら私の全ては有澤重工と共にあるのだから。

だが、それもあつけなく終わってしまった。

社長が墮とされたのだ。

あの、尊敬する社長が、あの我等有澤重工の象徴である『雷電』が。

『首輪付き』と呼ばれるリンクスに。

私は絶望した。

有澤重工が敗ける筈がない。有澤重工が一介のリンクスに敗れる訳がない。

気づけば私は回りの制止を振り切り、一人『首輪付き』に挑み、敗北した。

そこで私の命は終わった筈だった。

ああ、終わった筈だったのだ。

だが、次に意識が覚醒した時、私はこの世界で生きていた。有澤重工と社長、『有澤隆文』のいない世界で。

生きている意味などない。

そう思った。

だが、天は私を見捨てなかった。

このネクサスも無い世界にあったのだ。

有澤重工が！

私の魂の在り処が！

私は喜んだ。狂喜したと言ってもいい。

私はまた有澤重工に出会えた。

それだけで幸せだった。

故に私は彼処に再びいくために勉強し、就職する気だった。

ISが現れるまでは。

あれが現れてからと言う物有澤重工の成績は下降気味である。
有澤重工はISに手を出すには足りない物があった。

そう、優秀な戦士である。

戦士がいなくてはISをいくら開発しても意味が無い。

また絶望に沈みかけた。

その時に私は大人災に出会い、ISを操縦出来るようにしてもらった。

まあ、その代償は大きかったがね。

だが、良い。

それで良い。

私の夢は有澤重工にあり、私個人で払える代償ならばなんの問題もないのだから。

そして私は有澤重工の戦士、専属パイロットとなった。

全ては有澤重工を世界のトップ企業とするために。

さあ、まずはお披露目と行こう。

世界に有澤重工有りという事を見せるために。

セシリア・オルコット。

君には踏み台になってもらおう。

「……というわけです！ 聞いていましたか？」

「ああ、すまないね。また聞いていなかった」

私の言葉にセシリアの米神に青筋が浮かぶ。

「もうイイですわ。やはり極東には失礼な人種しかいないのですね。少しでも敬意を

払おうとした私が間違いでした。……さあ試合を始めましょう。それとも何か言っておきたい事はありますか？」

「そうだな。ならば少し喋らせてもらおうか」

私はこの場にいる全員に聞こえるように大きな声を出す。

「諸君、突然ですまないが聞いてくれないか？」

諸君、私は重火器が好きだ。

諸君、私は重火器が好きだ。

諸君、私は重火器が好きだ。

グレネードキャノンが好きだ。

榴弾砲が好きだ。

カノン砲が好きだ。

ガトリングガンが好きだ。

チェインガンが好きだ。

バズーカが好きだ。

地对地ミサイルが好きだ。

地对空ミサイルが好きだ。

多弾頭ミサイルが好きだ。

爆発が、硝煙が、爆音が、爆炎が、
土煙が、黒煙が、蹂躪が、殲滅が、

この世のありとあらゆる重火器とそれに伴う全てが大好きだ。

こちらに向かってくる敵をカノン砲で一纏めに吹き飛ばすのが好きだ。

重装甲を誇る相手を大型ガトリングガンで穴だらけにした時など心が躍る。

空を我物顔で飛び続ける相手を地对空ミサイルで墮とすのが好きだ。

圧倒的な物量を誇る相手を圧倒的な火力で粉碎したときなど胸がすくような気持ちだった。

速度を誇る相手を爆炎で巻き込んで打破するのが好きだ。

なんの技量も無い素人が重火器をもって、圧倒的な技量を持つ戦士を打倒した時は感動すら覚えた。

グレネードキャノンの爆炎が魅せる炎がたまらない。

大型ガトリングガンから吐き出され続ける空薬莖が奏でる音楽は最高だ。

堅牢な基地に籠り、絶対防衛の意志を持った相手を空からの爆撃と地上からの

ミサイルの嵐によって墮とした時など絶頂すら覚えた。

諸君、私は最高の重火器を望んでいる。

諸君、重火器が好きで好きでたまらない諸君。

諸君、私と共に歩もうではないか。圧倒的な重火器を背負い、世界を魅せようではないか！

さあ、我こそはと思わん者は立ち給え。

さあ、我こそはと思わん者達よ、続き給え。

我等こそ、世界最高の重火器を愛する者たち、『有澤重工』だ！」

私の叫びは回りは静かになる。

まだ、誰も理解できていないのだろう。

有澤重工という存在を。

だが、それでこそだ。

それでこそ広めがいがあるという物だ。

「……あなた、頭は大丈夫ですか？」

「ああ、なんの問題もないとも」

「……まあいいですわ。どうせ貴方は私に倒されるのですから！

さあ、貴方もISを起動させなさい！」

セシリアの言葉に私は深呼吸をし、呟く。

「起きろ。『震電』」

起動ワードと共に首から下げているペンダントが光り、装甲が展開される。

深い濃緑色の重厚な全身装甲。戦車を人型にすればこのような形になるだろう。

顔すらも覆うそれに周囲の顔が怪訝な物となる。

本来、ISとは必要最低限の装甲のみであり、パイロットの関節の動きを邪魔しないようにするものだからだ。

だが、私の『震電』は違う。

この重装甲こそが良い。

ああ、私は帰ってきた。

「それが、貴方のIS」

「そう、私の魂だ」

「では、始めましょう。さあ、踊りなさい！ 私のブルー・ティアーズが

奏でる円舞曲で！」

演目のような派手な動きを取るセシリア。

ああ、この舞台は自分が主役だと思ってるんだろう？

だが、違う。

主役は君ではない。そして私でも無い。

主役は有澤重工だ。

「セシリア・オルコット。君はカーニヴァルは好きかね？」

「は？」

「ふふ。私はね、円舞曲よりもカーニヴァルが好きなのだよ。だからこれから行われる

のは君の奏でる円舞曲ではなく、震電が開く祭りだ。『AKAKURA』
RA』起動」

言葉と共に震電の両肩に取り付けられた箱『AKAKURA』が開かれ、そこからは
数多という言葉すら生ぬるい数のミサイルが顔を覗かせる。

セシリアの額に汗が流れる。

「な、なんなんですよ。それは……」

「今分かる。さあ、ミサイルカーニヴァルの始まりだ！！」

粉塵と共にミサイルの嵐がセシリアに襲いかかる。

今この時においては空とミサイルの比率は3：7だろう。
もちろんミサイルが7だ。

「さあ、君も楽しみたまえ！」

「あなた、じつはバカなのですね！？」

「はははははははははは！　これが有澤重工だ！」

試合は私の勝利に終わった。
だが、その後何故か説教を食らった。
何故だ……。

これは前途多難な私、広瀬 道隆の有澤重工人生の物語である。

主人公設定

名前 広瀬 道隆

年齢 19

身長 178?

体重 65?

好きなもの 有澤重工、重火器

嫌いなもの 有澤重工に仇なすもの、コジマ

設定

ACFAの世界から転生した男。有澤重工に全てを捧げ、有澤重工の為に生きる。

そのことを不満に思った事は一度もない。

死した後、転生したがしばらくは無気力な生活を送る。だが、有澤重工がこちらにも

あることを知り、蘇る。

ISに乗れる理由は篠ノ之束と狂気という意味で共感し、改造を受けたため。

これからも彼は有澤重工の為に生きていく。

ヒロイン？ 多分重火器。まあ、誰か作るかもしれない。

一夏との関係性は不明。

こちら、有澤重工広報部長です（後書き）

どうですか？　これが私の有澤重工への愛です。

これからも彼は重火器と共に生きます。

さあ、皆重火器が好きなら、叫んで欲しい。社長！と。

それではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9582r/>

いつか書いてみたいと思ったネタの山

2011年12月9日23時49分発行